

農業委員会だより

発行 伊那市農業委員会

遊休農地でソルガムの試験栽培

農業委員 有賀 和志

西箕輪上戸区の上戸環境保全会（代表・鈴木好実）の新しい取組について紹介します。

上戸環境保全会では遊休農地を有効に活用して活動しており、毎年、小麦・そば・さつまいも等を栽培しその収穫物を活用して地域に還元することを続けています。

近年、農業者の高齢化や担い手不足などを背景に遊休農地が増えています。耕作を休止した農地は短期間に荒れてしまい、再び農地として利用するには大きな労力が必要です。また、地域の景観を損ない、雑草の種が周辺の農地に飛散したり枯れ草火災や野生動物の棲みかになったりすることも懸念されます。そこで、保全会では病気やけが、急な相続などやむを得ない事情で耕作できなくなった農地について、次の耕作者がみつかる

るまでできるだけ手間をかけずに農地を維持活用する方法を模索してきました。

本年度、保全会では新しい取組に挑戦しました。信州大学農学部・渡邊純教授と連携し、遊休農地を活用した「ソルガム」の試験栽培に取組みました。大学から栽培方法の指導や試験研究、学生による作業協力、保全会は試験圃場の提供、作業、普及啓発、収穫物の活用を担当しました。

ソルガムは「タカキビ」とも



呼ばれるイネ科の一年草。世界五大穀物のひとつでアレルギーフリーのため誰でも口にすることができず。根を深く張るため土壌を柔らかくする効果も期待できます。遊休農地の維持と農産物の生産を両立できる作物として注目されており、信州大学農学部ではこの地域に適した品種の改良も進められています。

さらに今回は、西箕輪中学校の2年生も総合学習の一環として参加しました。地域・学校・大学が一緒になってソルガムを育てながら、地域農業や遊休農地の課題についての学びの場ともなりました。信州大学農学部では中学生も参加し特別講義も行われました。生徒たちは学校での学習

が大学の専門知識や汗を流しながらの作業の実践と結びつき、農地の課題を身近な地域の問題と捉え考える機会となったのではないのでしょうか。秋には中学校の文化祭で生徒たちによる発表も行われました。その一連の経験が農地を守る担い手や地域を支える新たなつながりとなっていくことを願います。

また西箕輪小学校の職員研修でも今回の取組を紹介しました。「給食にソルガムを使えないか」といった前向きな声も聞かれ、新たなつながりの可能性も生まれています。小学校や地域の食育へと活動が広がれば、栽培だけでなく、食べることや商品づくりを通して、農業や農地の役割を身近に感じてもらうことも期待されます。



ソルガムは暑さが得意、今年の夏の高温の中でも順調に生育し、秋には収穫を行い予定した収穫量を得ました。収穫後の脱穀、乾燥、製粉を保全会が行い、レシピー開発や地域での活用も行われています。

ソルガム栽培を一時的な試験で終わらせず、遊休農地を守る具体的で持続可能な選択肢として地域に根付かせるとともに、子どもたちが地域の環境や農業を自分ごととして考えるきっかけになればと思います。保全会では今後、秋から春にかけて栽培できるヘアリーブッチ（マメ科植物）とソルガムの組合せの輪作による農地維持を検討していきます。

ソルガムを育てることが遊休農地を守ることにつながり、農地の再利用や地域の環境保全につながる。そして、地域の子どもたちの学びや交流、食の可能性にもつながる。この取組は、農地を守るだけでなく地域の人が関わり合い次の世代へ地域の魅力や農業の大切さを伝えていく活動にも感じられます。そんな地域の新しい取組をこれからもみんなで育てていってもらいたいと思います。

